

## ◆ 花葉会賞受賞者紹介

# 生産現場に立脚した花き栽培技術の研究・開発に貢献

## 宇田 明 氏

### 略歴

1947年7月22日生まれ  
1970年 千葉大学園芸学部園芸学科卒業  
兵庫県に就職 農業試験場淡路分場、花き担当研究員として配属  
1996年 「STSによる切り花の日持ち延長技術に関する研究」で、農学博士  
2000年 「前処理剤による切り花の品質保持に関する研究」で、園芸学会功績賞受賞  
2006年 兵庫県淡路農業技術センター農業部長  
2007年 農業技術功労者賞（(財)農業技術協会）受賞  
2008年3月 兵庫県退職  
2008年4月 宇田花づくり研究所代表、(株)なにわ花いちばテクニカルアドバイザー  
2009年4月 社団法人日本花き生産協会カーネーション部会技術顧問  
一般社団法人日本フローラルマーケティング協会技術顧問  
2012年2月 松下幸之助花の万博記念賞奨励賞受賞

宇田明氏は千葉大学園芸学部（花卉園芸学研究室に所属）を卒業後、兵庫県農業試験場淡路分場に就職。以来、試験場にて花きの試験研究を38年に渡って行ってこられた。

最初に勤務されたところが、淡路島で、カーネーションを中心とする切り花産地であったことから、切り花の栽培技術、育種を中心に研究を進めてこられた。特にカーネーションの栽培技術の開発に関われ、栽培技術の変遷に伴う技術確立に重要な働きをされた。



なかでも、切り花の鮮度保持、日持ち延長技術に関する研究では、STS（チオ硫酸銀錯塩）の切り花延命への利用について、基礎実験から実際の処理方法までを確立され、普及を図られた。この研究で農学博士



生け花5日目



生け花7日目

を取得されるとともに園芸学会からは功績賞を受賞された。低迷するカーネーション生産の活路を品質改善に求め、切り花内での銀の分布を指標としてSTSの処理方法を改善し普及された。

さらに、切り花のリファレンステストの普及にも力を注がれ、品質評価法を確立し、日持ち保証販売の基本を上げられた。これらの一連の業績に対し、2012年には松下幸之助花の万博記念賞奨励賞を受賞された。

ご退職後も、自ら設立された研究所をベースに生産者の視点に立ち、執筆活動や技術指導などを通じて、花き産業の振興と、農家の経営向上に貢献されている。また、ご自身のブログやfacebookでも生産者や技術者に常に情報を発信されておられる。

花葉会サマーセミナーでも何度かご講演をいただいております。その弁舌さわやかで分かりやすいお話は好評である。

(文筆：上田義弘)

画像は講演に使用したデータより

## ◆ 花葉会賞受賞者紹介

# ランンキュラスの多様性を拡大する

## 草 野 修 一 氏

### 略歴

- 1955年 横浜市生まれ
- 1978年 千葉大学園芸学部生産管理学科卒業  
愛川園芸設立
- 1990年 宮崎県へ移住。綾園芸設立
- 2011年 日本フラワー・オブ・ザ・イヤーズ 2011 ベストフラワー  
優秀賞、ニューバリュー特別賞、ブリーディング特別  
賞受賞
- 2012年 日本フラワー・オブ・ザ・イヤーズ 2012 切り花最優秀賞、  
カラークリエイティブ賞受賞  
フェンロー国際園芸博覧会（フロリアード 2012）ゴ  
ールドメダル受賞

草野修一さんは神奈川に生まれ、1978年に千葉大学園芸学部を卒業。卒業するとすぐに、義兄にあたる五月女武男氏と神奈川県愛甲郡愛川町に土地を求めて愛川園芸を開業し、しばらくは鉢花の生産に専念した。当時は育種に手を出すものの長続きしなかったという。

1990年、彼は父親とともに宮崎県東諸郡綾町に土地を求めて、愛川園芸から独立する決意をした。父親の草野総一氏は（株）サカタのタネ・中井農場でプリムラやダイアンサス、ランンキュラス、ガーベラなどの育種を手掛けた著名な育種家である。その父はジュリアン・ハイブリッドの生みの親であり、巨大輪ランンキュラスの虹シリーズや切花用品種のビクトリア・ストレインは、世界初となるミニタイプの四季咲きカーネーションのフィーリングシリーズ、ポットガーベラなど、多くのヒット商品を世に送り出した。

綾町の土地は父の知人で育種家の松永一氏の紹介で買い求めることになった。草野修一さんは家族と両親



とともに移住し、（有）綾園芸を設立した。生産は愛川園芸時代の鉢物を引き継ぐとともに、父の意見もあり、ランンキュラスの切り花生産を手掛けることになった。それは、当時ビクトリア・ストレインの種子は欧州を中心に大きな需要があるのに国



フロリアード  
ゴールドメ  
ダルやフラ  
ワーオブザ  
イヤーズを  
受賞したピ  
オニー咲き

内の需要はほとんどなく、その原因を探るために切り花生産するというものだった。初めての切り花生産は3月に開花し、市場出荷をすると30円ほどにしか売れず、とても採算が合うものでなかった。ビクトリア・ストレインは晩生で、大輪の割に茎が細いといった欠点があり、それ以降はどうすれば生産が成り立つのか、父親と相談しながら作型の開発や育種を手掛けることになった。その父も数年してこの世を去り、その後は一人で育種を進めることになった。

ランンキュラスの育種は順調といえるものでなかったという。作型の開発と育種により、販売期間を長くすることは意外に早く目標を達成できて、市場単価もどうにか採算点を超えるようになったが、それは自信を持って生産者に勧められるほどでなかった。ランンキュラスは他家受粉性であるために、F1品種育種に必要な純系を作るのにたいへんな時間と労力を要する。それでも純系を作る努力を続けていたのだが、育種を始めて10年が過ぎるころから、その中に多様な変異が出現し始め、それ以降にランンキュラスの花形や花色の多様性が一気に広がったという。

一方、フラワースピリッツの上條信太郎氏との出会いから満開状態で販売する切り花の商品化が始まり、それが大成功を取めた。つぼみが色づいた状態の出荷は輪の大きさや多様な花色を評価しにくいのが、満開の花はそれらを評価しやすくし、そのことが育成品種の用途を拡大し、需要全体を大きくしてくれた。

最近では芳香に注目した育種や種間交雑による育種をしている。また、育成品種はまだほとんど輸出しておらず、世界で受け入れられる品種の作出も大きな夢という。

（文責：長岡 求）

画像は講演に使用したデータより